

令和元年6月25日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03469

研究課題名（和文）大学の評価・IR機能の高度化のための実践知の収集・分析とその活用に関する研究

研究課題名（英文）Research on collection and analysis of practical knowledge for upgrading IR function of University

研究代表者

嶋田 敏行（Shimada, Toshiyuki）

茨城大学・全学教育機構・准教授

研究者番号：00400599

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究により大学マネジメントの高度化に資する実践的な「知」を収集、整理し、それらを共有するための方法論を構築することができた。具体的には、事例を共有するためのセミナーの開催メソッドを開発し、効果的なセミナーを展開した。4年間で合計89件の報告があった。IRの実践事例の体系化のためのジャーナル発行については、9号分を発刊し、合計39編の論文、事例報告、スライド資料を社会に向けて発信した。また、マネジメント支援を担う大学評価、IR人材の能力高度化のために教育プログラムの開発や要素ごとの段階別能力表（ルーブリック）の構築を図ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

各大学の評価・IR活動や米国調査から得られた知見（実践知）を全国の評価担当者、IR担当者と共有する【アウトプット】ことで、それぞれの業務の高度化を図ることが出来た【アウトカム】。日米の評価やIRを用いた課題分析手法を体系的に整理し、それらの実践知を高等教育機関の現状把握・課題分析ツールとして国内外の高等教育機関に提供し【アウトプット】、このことで、各機関の意思決定の高度化（迅速化）を図ることができた【アウトカム】。

大学経営の高度化により、さらなる教育・研究の質の向上が図られることで、我が国の国際競争力の向上に寄与することができた【アウトカム〔波及効果〕】と考えている。

研究成果の概要（英文）：Through this study, we constructed a methodology to collect, organize and share practical "knowledge" that contributes to the advancement of university management.

We developed a method for managing seminars, publishing journal to share the cases of university evaluation and institutional research method, and an educational program and rubric to improve the ability of institutional researchers.

This research has advanced the evaluation and IR activities of universities.

研究分野：高等教育

キーワード：高等教育機関 IR アセスメント 質保証 大学評価

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

当初、我が国の高等教育では、従来からの教育の質の保証・質の向上に加え、ガバナンス改革など大学の運営体制の高度化が求められており、迅速な意思決定を実現する工夫やそのための IR 機能の強化・充実が求められていた。申請者は、大学のマネジメントの高度化に資する大学評価や IR に関する実践事例の収集や共有を進めている中で、実践事例のライブラリ化、現状把握・課題分析のツール化、教育コンテンツ化を行うことで、これらの社会の期待に応える必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、国内外約 130 機関の評価担当者・IR 担当者との連携をベースに、まずは全国の高等教育機関における評価活動や IR 活動から得られた知見（現状把握手法、分析手法、課題の解決手法、体制構築法等）を収集・整理し、各大学で活用可能な実践事例ライブラリを構築し公開する。収集したライブラリに、米国の事例も加え、IR・評価の実践知の体系化を図り大学の意思決定の高度化・迅速化のために汎用性のある評価や IR の活用法（現状把握・課題分析ツール）を開発し、各大学へ研修コンテンツとして提供する。この研究の成果によって、高等教育機関における IR・評価などの意思決定支援機能が実質化される。これは、我が国で大学執行部、学部執行部等において IR・評価情報を活用した意思決定の高度化（迅速化）が図られることを意味する。

3. 研究の方法

前述の目的を達成するために、日米の評価・IR の実務者・研究者 18 名から構成される教職協働研究チームを置いた。研究目的を達成するために、以下の 3 つの調査・研究を実施する。

[実践事例ライブラリ] 評価・IR 活用手法の収集、整理、ライブラリ化（共有化）を図るための実践的手法を開発する。事例研究会の構成、情報誌の作成を通して事例収集の手法、内容の妥当性確保の手法の実践的開発を行う。

[現状把握・課題分析ツール開発] 国内事例の体系化・実証モデル化を図りつつ、米国の実践事例調査結果を加え、各大学の意思決定支援で役に立つ評価・IR を用いた現状把握・課題分析ツールを開発する。

[教育コンテンツ化] の実践・普及のための評価・IR 人材向け研修プログラムの開発を行う。現状把握・課題分析ツールは、これらの教育コンテンツとして整備する。また、そのための要素別の能力の段階評価表（ルーブリック）を作成する。

4. 研究成果

平成 27 年度は、年度計画「IR 実務担当者連絡会を 2 回開催し、web ジャーナル 2 号以上発刊し、事例を 10 件以上収集する。これらを継続的に進めるような仕組みについて骨格を作る。」という年度計画を立てて、研究を推進した。テーマ「全国の高等教育機関から収集した評価・IR 実践手法のライブラリ化については、IR 実務担当者連絡会を 4 回（大阪府茨木市：36 名参加、山形県山形市：26 名参加、福岡県福岡市：41 名参加、大阪府茨木市：33 名参加）開催し、口頭発表で 21 件の報告があったことから年度計画に示した数値目標は上回っている。web ジャーナルを本格発行し 4 号を発刊することができた。評価・IR の実践事例の収集を開始し、論文で 18 件の報告があった。事例収集上の課題や整理する上での課題について、洗い出しを開始した。合計 5 号（第 1 号は申請中に試行）の発刊で得た知見をもとに、年度内に編集プロセスの改正案、投稿区分の改正案と査読の手引きと審査用ルーブリックの案を作成した。テーマ

の実証モデル化、現状把握・課題分析ツール化については、米国メイン州立大学のアセスメント担当者の本田寛輔氏を招いた勉強会を開催し、米国において IR が使用する学内限定のデータや事例の共有方法や、実際の IR 活用事例を収集した。一方で、米国ベミジ州立大学に 1 週間滞在し、実際の IR 業務（ファクトブック作成等）を行うことで（インターンシップ）米国 IR 業務の位置づけとワークフローの体感的理解を図った。テーマ の研修の実施については、平成 28 年 2 月の IR 実務担当者連絡会において報告し、参加者と議論を行った。

平成 28 年度の年度計画は「IR 実務担当者連絡会と web ジャーナルを定例化・定型化する。また、評価・IR 活用手法の実証モデル化を進めるとともに、我が国でも応用可能な事例等について、積極的に公表する。」であったが、IR 実務担当者連絡会は 4 回開催ができた。web ジャーナルのフォーマットと発行方式の見なおしを行ないつつ 2 号発行した。では、実務担当者連絡会は 4 回開催し、参加者の合計は 134 名、満足度は 98.8%であった。新投稿規定になってから投稿数は 4 件であった。では IR 実務担当者連絡会だけでなく大学評価担当者集会（出席者 122 名：満足度 95%）において多くの事例を収集した。大学固有の事情を伏せつつ、IR などの実践事例を共有する方法については、引き続き調査、検討を行っている。では調整金を用いて IR 初級人材育成研修を九州大学、茨城大学と共同で実施した。また、継続的改善のための IR/IE セミナーも開催し、合計 316 名に対して研修コンテンツの提供を行った。

平成 29 年度は、テーマ の「評価・IR 実践事例のライブラリ化」については、事例報告会の IR 実務担当者連絡会を立命館大学（5 月）、帯広畜産大学（7 月）、明治大学（10 月）、九州工業大学（3 月）の 4 回開催し、20 事例を収集し、内容の分析を行った。また、ジャーナル発行については、これまでの編集プロセスに関する研究会を開催し、実践事例を収集しやすい要

因について議論を行うことで、投稿区分やフォーマットの見直しを図った。テーマ「評価・IR」の
評価・IRを活用した現状把握・課題分析のツールの開発・研修コンテンツ化については、日米の
評価・IRの課題解決支援事例の分析から得られたIR活用のための実証モデル(4階層質保証
モデル)を構築し、IRを内部質保証における「現状把握・課題分析のツール」として運用でき
るような仕組みを検討した。即ち、IRが活用されている状態を「常に学内において、誰かの役
に立っている状態」と定義し、教育分野を中心に、FDやSDへの情報提供サービスのルーチ
ン化という観点で、IRというツールを大学に組み込めばよいことが分かった。そこで、実際に
複数の大学で実験的な運用を行い、現場教職員の協力のもとでデータ提供と活用事例を集め、
そこから得られた知見を大学評価・IR担当者集会(全国の評価、IRの担当者が集まる研究会)
やIR実務担当者連絡会、複数の大学における招待講演等で報告し、参加者と議論を行なうこ
とで、その精度を高めた。

最終年度の取り組みを含めた4年間の成果を整理すると、テーマ「評価・IR実践事例の
ライブラリ化」については、九州工業大学(8月)、三重大学(11月)、九州工業大学(3月)
においてIR実務担当者連絡会を開催し、IR実務を整理、議論し、共有するための「セミナー
開催手法」のプログラム化が完了した。運営マニュアルは今後、公表予定である。このような
IRの実践事例は4年間で合計89件報告があった。それらIRの実践事例は、情報誌(ジャー
ナル)して発行され、合計9号分を発刊し、合計39編の論文、事例報告を体系的に整理した。
査読プロセスなどの研究を進め、ループリックの改良などを行ったが、結論としては、米国同
様IRに普遍性がないことやIR担当者のバックグラウンドの多様性から、画一的な査読基準
の設定は困難ではないか、という結果となっている。また、論文、事例報告に至らないIR実践
事例は、スライド資料(55件)としてwebサイトを通して共有を図った。

の[現状把握・課題分析ツール開発][教育コンテンツ化]については、評価やIRのリ
サーチ(評価)デザイン→収集→分析→活用の各フェイズの留意点をとりまとめ、評価・IRを
用いた現状把握・課題分析ツールとして公表した(畠田・山本(2018)ほか)。加えて、IR人
材の能力段階について整理を行い、平成30年の7月に全国実態調査を行い、231件の回答を
得て、段階別の能力定義表をほぼ完成させた。これらの知見を活かした教育プログラム群を構
築し、それらの実践的検証イベントとして、平成30年8月には大学評価・IR担当者集会2018
を九州工業大学において開催した。13のセッションを展開し、約750名の参加者があった。
平成31年3月には、九州工業大学において継続的改善のためのIR/IEセミナーを開催し、3
つのセッションを開催し、評価担当者、IR担当者の能力段階に応じた研修プログラムを開発し
提供することができた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計8件)

畠田敏行ほか(2015)「IRオフィス運用する際の留意点に関する考察」、情報誌『大学評
価とIR』、第2号、27-36。(査読あり)

畠田敏行(2015)「内部質保証システムの構築に資する学生の成績の推移と就職先のデー
タセットについて」、情報誌『大学評価とIR』、第3号、11-19。(査読あり)

畠田敏行(2015)「留年してしまう学生の効率的・効果的な検出方法についての検討」、情
報誌『大学評価とIR』、第4号、18-25。(査読あり)

佐藤仁(2015)「IR人材に求められる力量からIR組織に求められる知性へ - テレンジー
ニ(Patrick T. Terenzini)による3つの知性論の再検討 - 」, 情報誌『大学評価とIR』、第
4号、35-42。(査読あり)

浅野茂(2015)「IRの4つの顔」から見える日本の大学のIR像」, 情報誌『大学評価とIR』、
第4号、43-50。(査読あり)

畠田敏行(2016)「学生調査の際に学籍番号を取得することに関する小考察」、情報誌『大
学評価とIR』、第7号、11-16。(査読あり)

畠田敏行ほか2名(2016)「日米における中規模大学のIR活動に関する事例研究」、『名古
屋高等教育研究』、16、287-304。(査読あり)

藤井都百(2016)「国立大学第3期中期目標期間の中期計画に含まれる指標の種類と特性」、
情報誌『大学評価とIR』、第7号、3-10。(査読あり)

[学会発表](計6件)

畠田 敏行(2017)「内部質保証システムをTQMから考える」平成29年度第3回 IR実務
担当者連絡会。

大野賢一・畠田 敏行(2017)「各大学で共通に見られる現象の括りだしから「共通知」を
整理する」平成29年度第3回 IR実務担当者連絡会。

畠田敏行ほか(2018)「我が国のIRオフィスの現状から考えるIR立ち上げ後の課題とその
解決」, 継続的改善のためのIR/IEセミナー2018[セッション2]日本型IRの課題とその
解決に向けたセッション。

畠田敏行(2018)「我が国のIR担当者の現状について(H30.7月調査報告)」, 大学評価・
IR担当者集会2018(九州工業大学)。

畠田敏行ほか(2018)「我が国のIRオフィスの現状から考えるIR立ち上げ後の課題とその

解決」継続的改善のための IR/IE セミナー2018，セッション 2 日本型 IR の課題とその解決に向けたセッション（九州工業大学）。

寫田敏行（2018）「指標の立て方実践講習 - 事例・考え方・演習・妥当性 - 」，指標の立て方実践講習（三重大学）。

〔図書〕（計 2 2 件）

大学評価コンソーシアム情報誌編集委員会（代表者：寫田敏行）編（2015～2019）「情報誌『大学評価と IR』」，第 2 号～第 10 号，大学評価コンソーシアム，17 ページ～77 ページ。

寫田敏行ほか（2015）『米国におけるアセスメント実践事例に関する勉強会報告書』，大学評価コンソーシアム，58 ページ。

寫田敏行ほか（2015）「大学評価担当者集会 2015 全体会『大学評価は IR で高度化できるのか？』報告書」，大学評価コンソーシアム，128 ページ。

大野賢一ほか（2015、2016、2017、2018）「大学評価・IR 担当者集会 評価・IR 実践セッション報告書」，大学評価コンソーシアム，57～79 ページ。

関隆宏・土橋慶章（2015、2016、2017、2018）「大学評価・IR 担当者集会 評価初心者セッション報告書」，大学評価コンソーシアム，47～57 ページ。

大野賢一ほか（2015）『大学評価担当者集会 2015 プレイベント 1 「米国における IR の実践事例 - 指標の設定とその活用 - 」実施報告書』，大学評価コンソーシアム，72 ページ。

寫田敏行・山本幸一（2018）「大学評価・IR 担当者集会 2017 IR 初心者 / 初級セッション報告書」，大学評価コンソーシアム，124 ページ。

〔その他〕

ホームページ等

大学評価コンソーシアム web サイト

<http://iir.ibaraki.ac.jp/jcache/index.php>

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：小湊 卓夫

ローマ字氏名：Kominato Takuo

所属研究機関名：九州大学

部局名：基幹教育院

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：30372535

研究分担者氏名：浅野 茂

ローマ字氏名：Asano Shigeru

所属研究機関名：山形大学

部局名：学術研究院

職名：教授

研究者番号（8 桁）：50432563

研究分担者氏名：大野 賢一

ローマ字氏名：Ono Kenichi

所属研究機関名：鳥取大学

部局名：学長室

職名：教授

研究者番号（8 桁）：90314608

研究分担者氏名：佐藤 仁

ローマ字氏名：Sato Hitoshi

所属研究機関名：福岡大学

部局名：人文学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 30432701

研究分担者氏名: 関 隆宏

ローマ字氏名: Seki Takahiro

所属研究機関名: 新潟大学

部局名: 学術研究院

職名: 教授

研究者番号(8桁): 30380546

研究分担者氏名: 藤井 都百

ローマ字氏名: Fujii Tomo

所属研究機関名: 九州大学

部局名: インスティテューショナル・リサーチ室

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 50437092

研究分担者氏名: 土橋 慶章

ローマ字氏名: Tsuchihashi Yoshiaki

所属研究機関名: 神戸大学

部局名: 大学戦略企画本部

職名: 政策研究職員

研究者番号(8桁): 90730664

(2)研究協力者

研究協力者氏名: 末次剛健志、藤原将人、山本幸一、藤原宏司、小林裕美、難波輝吉、浅野昭人

ローマ字氏名: Suetsugu Takeshi, Fujiwara Masato, Yamamoto Koichi, Fujiwara Koji, Kobayashi Hiromi, Nanba Kiyoshi, Asano Akito

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。